



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成30年(2018年)11月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

被爆七十二周年平和記念式典

世界にまだ一万四千発を超える核兵器がある中、意図的であれ偶発的であれ、核兵器が炸裂したあの日の広島を再現させ、人々を苦難に陥れる可能性が高まっています。

被爆七十三年目の八月六日

(月)、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典(広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式)が行われ、被爆者や遺族など約五万人が参列して犠牲者の冥福と恒久平和を祈りました。式典は午前八時に始まり、最初に松井一實広島市長と遺族代表二人が、この一年間に亡くなられたことが確認された五千三百九十三人の氏名が記載された二冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は三十一万四千四百八十八人、名簿総数は百十五冊となりました。

続いて永田雅紀広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された八時十五分に、遺族代表の上峠賢太さんと、こども代表の森下碧さんが平和の鐘をつき、参列者全員が一分間の黙祷

を捧げました。

この後、松井市長が平和宣言を行いました。宣言の中で市長は、「あなたや大切な家族がそこにいたらと想像しながら聞いて下さい」と呼び掛け、昭和二十年(一九四五年)八月六日午前八時十五分に広島の上空で炸裂した原子爆弾による惨禍を、被爆者から寄せられた体験談により描写しました。そして、当時二十歳だった二人の被爆者の訴えを紹介し、被爆者は、為政

者に対し、理性と洞察力を持つ

て核兵器廃絶に向かうよう求めており、その取組が各国の為政者の理性に基づく行動によって継続するようにしなければならぬと訴えました。

また、核抑止や核の傘という考え方は、核兵器の破壊力を誇示し、相手国に恐怖を与えることによって世界の秩序を維持しようとするものであり、長期にわたる世界の安全を保障するには、極めて不安定で危険極まりないものと述べ、為政者に、NPT(核兵器不拡散条約)に義務づけられた核軍縮を誠実に履行し、さらに、核兵器禁止条約を核兵器のない世界への一里塚とするための取組を進めるよう求めました。

日本政府には、国際社会が核兵器のない世界の実現に向けた対話と協調を進めるよう、その役割を果たすことや、平均年齢が八十二歳を超えた被爆者をはじめ、放射線の影響により心身に苦しみを抱える多くの人々の



平和宣言を行う松井市長

目次

被爆73周年平和記念式典	1	「原爆の絵」が完成	8
長崎原爆犠牲者慰霊の会/青少年「平和と交流」支援事業	2	こども平和キャンプ/英語で伝えようヒロシマセミナー/国内3都市で原爆展を開催	9
平成30年度ひろしま子ども平和の集い/ピースナイター2018	3	海外からの来訪者が発信するメッセージ	10~11
ピースマッチ、ピースアクティビティの開催支援/中・高校生ピースクラブ「ヒロシマ青少年平和の集い」	4	被爆体験伝承者等を全国に派遣しています/被爆体験記の執筆をお手伝いしています	12
被爆体験記「あの日の思い出」(川崎宏明)	5	広島市外国人市民の生活相談コーナー/国際交流ラウンジ	13
国際平和シンポジウム(長崎)/「国際平和デー」記念行事/国連軍縮フェロズの受入れ	6	平成29年度下期および平成30年度上期国際交流・協力補助金交付事業報告会の開催/JICAサロン「キルギスってどんな国?」/災害関連情報の多言語サイトを開設	14
収蔵資料の紹介コーナー「お母さんに会いたい」/特別展「広島赤十字病院」/資料展「こうの史代「夕凧の街」複製原画展」	7	姉妹・友好都市の日記念イベント(ボルゴグラード)/新国際交流員のご紹介	15
		「ドイツ・ハノーバー市との青少年交流」(広島ハノーバー友好協会 会長 井内康輝)	16

苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降地域」を拡大するよう強く求めました。

平和宣言の後、こども代表の新開美織さんと米広優陽君が、被爆者の証言を聴き、被爆資料の見学や慰霊碑巡りなどで学んだことから、強く平和を願いなから、「平和への思いを折り鶴に込めて、世界の人々へ届けます。七十三年前の事実を、被爆者の思いを、私たちが学んで心に感じたことを、伝える伝承者になります。」と「平和への誓い」を読み上げました。

この後「あいさつ」の中で、安倍晋三内閣総理大臣は、近年、核軍縮の進め方について、各国の考え方の違いが顕在化している」と指摘し、真に核兵器のない世界を実現するためには、被爆の悲惨な実相の正確な理解を出発点として、核兵器国と非核兵器国双方の協力を得ることが必要であり、政府として、粘り強く双方の橋渡しに努め、国際社会の取組を主導していくと述べました。そして、具体的な取組として、NPT発行五十周年となる二〇二〇年の運用検討会議が意義あるものとなるよう、積

極的に貢献していくことや、若い世代が被爆者の方から伝えられた被爆体験を語り継いで行く取組を推し進める考えを示しました。

今回の式典では、昨年に引き続き、アントニオ・グテレス国連事務総長のメッセージを、中満泉国連事務次長兼軍縮担当上級代表が日本語で代読しました。事務総長は、過去何十年にわたり核兵器のない世界という共通の目標に向け機運が高まってきたが、今、その進歩は停滞していると指摘し、そうした中、昨年、核兵器禁止条約が採択されたことは、核兵器の持つ脅威に恒久的に終止符を打つことに強く、正当な国際的支持が存在すること、そしてこの目標の達成が遅々として進まないことへの不満が存在することを示したと述べました。そして、世界の指導者は、対話と外交の重要性を認識し、核兵器の完全廃絶、そしてすべての人にとってより安全で安定した世界の実現に向け、再び共通の道を歩まねばならないと訴えました。

式典には四十都道府県の遺族代表の他、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランス、ロシアを

含む八十五か国と欧州連合（EU）の大使や代表が参列しました。

式典の様子はインターネットでライブ中継されました。動画は、ひろしまムービーチャンネル (<http://www.city.hiroshima.jp/movie/>) の「原爆・平和」から視聴できます。式典で読み上げられた「平和宣言」、「平和への誓い」の全文は、広島市ホームページ (<http://www.city.hiroshima.jp/>) の「原爆・平和」↓「平和宣言・平和への誓い」平和に関する要請等」から閲覧できます。「平和宣言」は九言語（アラビア語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ハンガール、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語）の外国語版も閲覧できます。

長崎原爆犠牲者慰霊の会

本財団では、長崎に原爆が投下された八月九日に、同じ被爆地である広島から長崎の原爆犠牲者に哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにすため、「長

崎原爆犠牲者慰霊の会」を開催しています。

広島平和記念資料館東館地下一階ホワイエで開催した今年の慰霊の会には、被爆者や国内外からの来館者など約九十人が参加しました。

まず、小溝泰義本財団理事長の挨拶で開会し、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のテレビ中継を視聴しました。原爆炸裂時刻の午前十一時二分には、全員で一分間の黙とうを捧げました。

続いて、広島県原爆被害者団体協議会の佐久間邦彦理事長から挨拶をいただき、最後に、長崎の被爆者証言ビデオ（証言者・高野澄子さん）を視聴して閉会しました。

（平和連帯推進課）



佐久間理事長の御挨拶

青少年「平和と交流」支援事業

核兵器廃絶と世界恒久平和の実現のための人材育成と、平和首長会議の加盟都市間のネットワーク強化を目的とする、青少年「平和と交流」支援事業を実施しました。

この事業は、国内外の平和首長会議加盟都市の青少年を対象に、被爆者の体験や平和への思いなどを伝え、若者同士の交流を深めるため、広島市等が実施する事業への参加を支援するものです。



参加者による意見交換 (HIROSHIMA and PEACE)

別表のとおり、今夏「HIROSHIMA and PEACE」のひろしま子ども平和の集い、「ヒロシマ平和セミナー」の三事業

を対象に支援を行いました。
また、各プログラムにあわせ
て、平和首長会議の概要説明や
意見交換会等の平和首長会議の
独自プログラムを実施しました。
(平和連帯推進課)

対象事業 (広島市等の所管)	広島市等が実施 する事業の概要	平和首長会議 独自プログラム を含めた全体日程	平和首長会議 独自プログラム を含めた実施場所	支援人数 (実績)	参加者の 派遣元加盟自治体
HIROSHIMA and PEACE (広島市立大学国際学部)	国内外の学生等が 「ヒロシマと平和」 を英語で学ぶ夏期 集中講座	7/31～8/10 (11日間)	広島市立大学、 平和記念資料館等	9人 (学生・ 社会人)	バメンダ1市(カメルーン)、 バルセロナ市(スペイン)、 グラノラズ市(スペイン)、 マンチェスター市(英 国)、サントス市(ブラジ ル)、テヘラン市(イラン)、 東京都三鷹市、東京都 台東区、岐阜県高山市
ひろしま子ども平和の集い (・(公財)広島平和文化 センター ・広島市(市民局、 教育委員会)	子どもたちによる 平和メッセージの 発信	8/5～8/7 (3日間)	国際会議場、 平和記念資料館等	15人 (小中学生 ・引率者)	神奈川県茅ヶ崎市
ヒロシマ平和セミナー (広島市立大学広島平和 研究所)	公務員や大学院生 等を対象にした 平和・国際関係に 係る集中講義	8/24～8/26 (3日間)	広島市立大学サテ ライトキャンパス、 平和記念資料館等	4人 (公務員)	北海道札幌市、山形県山 形市、長野県松本市、岐 阜県高山市

「平成三十年度 ひろしま子ども 平和の集い」の開催

八月六日(月)、広島市、広
島市教育委員会との共催により、
若い世代の平和意識の高揚と主
体的な取組の促進を図る「平成
三十年度ひろしま子ども平和の
集い」を広島国際会議場で開催
しました。

最初に、広島市市民局長が挨拶
を行い、広島県内外から参加
した十一団体の児童・生徒に、
平和への熱いメッセージを広島
の地から世界に向けて発信して
ほしいと呼び掛けました。

その後、児童・生徒は、平和
への思いをメッセージ発表や合



発表する神奈川県の茅ヶ崎市平和大使

唱、群読や作文朗読など、様々
な表現方法で発表しました。
児童・生徒の多くは、当日の

朝、平和記念式典に参列してお
り、全ての発表において、平和
な世界の実現に向けた子どもた
ちの熱意と高い意識が感じられ
ました。

最後に、発表した全ての団体
に、広島市教育長がそれぞれ「ア
オギリ賞」、「折リ鶴賞」として、表彰
状と記念の楯を贈呈しました。

会場は、開会から閉会まで多
くの来場者で賑わいました。
(平和連帯推進課)

「ピースナイター 二〇一八」の開催

八月七日(火)、本財団と生

協ひろしま等との共催により、
広島東洋カープの試合の場を活
用して、核兵器廃絶と世界恒久
平和の実現に向けたメッセー
ジを発信する、「ピースナイター
二〇一八」をマツダスタジアム
で開催しました。

① 大型ビジョンで松井市長や
湯崎県知事等の平和を願う



緑色と赤色のピースポスターを用いて原爆ドームと同じ高さ
に「ピースライン 25」を作る観客

② 被爆四世でJ1サンフレッ
チェ広島かわべはろの川辺駿選手が始
球式を行いました。

③ 広島東洋カープの監督、選
手等がユニフォームにピース
ワッペンを着けてプレーしま
した。

④ 五回裏終了時に、入場者が、
配付されたピースポスターを
掲げて、球場全体が平和首長
会議のイメージカラーである
緑色に染まる中、原爆ドーム
と同じ高さの地上25メートル
に復興の象徴であるカープを
イメージした赤色の線「ピー
スライン25」を作り、平和へ
の願いをアピールしました。

また、グラウンドでは、地元高校生等による「ピースパフォーマンス」を行いました。

約三万人の方々に参加いただくとともに、「ピースライン25」及び「ピースパフォーマンス」は全編テレビ生中継が行われ、多くの方が核兵器廃絶及び世界恒久平和について考える日となりました。

(平和連帯推進課)

ピーススマッチ、ピースアクティビティの開催支援

広島・長崎の平和記念(祈念)式典から数日後の八月十一日(土)、サッカーJ1のリーグ戦、サンフレッチェ広島対V・ファールン長崎の試合が、「ピーススマッチ」として、平和首長会議と本財団等の後援のもと、エディオンスタジアム広島で開催されました。キャッチコピーは、「One Ball. One World. スポーツができる平和に感謝」です。試合会場には、約二万人の観客の方々に来場いただきました。

当日は、会場内外でのピース



試合開始前の平和祈念セレモニーに臨む広島・長崎市長、広島・長崎の被爆者

アクティビティとして、

① 平成三十年の広島・長崎の平和宣言と、「原爆の子の像」に寄せられた折り鶴再生紙を使った折り紙を観客に配布し、核兵器廃絶に向けた世論の醸成を図りました。

② 試合開始前に、来場者全員による黙祷、広島市長・長崎市長によるキックインセレモニーを行いました。

③ 広島市立広瀬小学校の校長を講師に迎え、「被爆樹でつながる、広島・長崎」と題した平和学習を行いました。長崎の児童を含む小学生約八十人とその保護者は、真剣に話に耳を傾けていました。

④ 広島・長崎の被爆の実相と

現在の核兵器の状況、そして平和の大切さを伝えるため、「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ボイス」などのブースを展覧しました。

⑤ 来場者が平和への感謝・思いをメッセージボードに記入しました。このメッセージボードを八月十七日(金)～三十一日(金)まで広島市役所市民ロビーに展示し、ピーススマッチで発信された「平和への思い」を共有しました。

サンフレッチェ広島、V・

ファールン長崎、サポーター、協力団体が連携し、多くの方に平和への思いを届けることができました。

(平和連帯推進課)

中・高校生ピースクラブ「ヒロシマ青少年平和の集い」の実施

本財団は、平成十四年度から、被爆の実相を学び、平和に対する見識を高めるとともに自ら平和の推進に取り組む人材を育成することを目的として、中・高校生ピースクラブを運営してい



中・高校生ピースクラブによる原爆被害の概要説明



平和についてディスカッションする参加者

ます。

平成三十年度は中学一年生から高校三年生まで四十人が参加し、平和記念資料館の見学や平和記念公園内の慰霊碑などの学習、被爆体験証言者の方からお話を聴くなどとして、戦争の恐ろしさや平和の大切さを学んでいます。

八月五日(日)には、被爆の実相や平和の尊さを発信する「ヒロシマ青少年平和の集い」を実施し、平和記念式典等に参加するために全国から派遣された十六団体・百六十四人の青少年が参加しました。

当日は、中・高校生ピースク

クラブ代表者四人が原爆被害の概要を説明した後、証言者の瀬越睦彦さんが自身の被爆体験について講話を行いました。

その後、「平和をどのように伝えるか」をテーマに六人一グループでディスカッションをしました。

参加者からは、「被爆体験講話を聴き、平和の大切さ、戦争の恐ろしさがわかりました」、「様々な地域から来た同世代の子供達と話すことで、平和に近づくには一人ひとりの意識が大切だと思いました」といった声が寄せられました。

(平和記念資料館 啓発課)



プロフィール
 [かわさき ひろあき] ——
 昭和13年(1938年)生まれ。爆心地から1.3kmの東観音町の自宅で被爆。6人の家族は他の被爆者に交じり西広島地区を経て市内北部の親戚宅に避難。途中、ケガや火傷をして避難している人、力尽き座り込んだり横たわっている人を多数目撃。
 平成28年度から被爆体験伝承者として、平成29年度から被爆体験証言者として活動。

被爆体験記

peace あの日の思い出

本財団被爆体験証言者
川崎 宏明

プロローグ

昭和二十年(一九四五年)五月、小学校一年生の私は、祖母に連れられて山県郡に縁故疎開しました。その直後、四歳だった妹も三原の母方の実家に一人で預けられたのですが、余りにも寂しがるために、わずか半月足らずで再び両親の元に戻されたそうです。

私も、やはり同じような寂しい毎日を送っていました。それを察したのか、祖母が時々広島に連れて帰ってくれました。そして二、三日家族と過ごし、元氣を取り戻すと再び疎開先に戻るといふことを何度か繰り返しました。最後の広島帰りは原爆が落ちる一、二日前でした。

ビカッ! ものすごい光が私を包みました

八月六日の朝、教師だった父はいつもの様に自転車に乗って学校に出かけました。原爆が落ちる少し前、父を除く六人の家族は涼しい居間に集まり、一歳の弟をあやしていました。

やがて母が弟をトイレに連れて行きました。退屈した私は外に出てみようと思ひ、一人で玄関に行き、靴を履き終えた瞬間でした。

「ビカッ!」ものすごい光が私の周りを包みました。驚いた私は靴を履いたまま先

ほどまでいた居間に走りこみました。居間に逃げ込むのと建物が倒れるのは、ほとんど同時でした。柱が倒れ、天井は小学生の私でも手の届くところまで落ち、舞い上がった埃で辺りは一瞬で真っ暗になりました。母が弟を抱き、手さぐりで居間に戻ってきました。私たちは皆、家に直撃弾が落ちたと思ひました。しかし、いくら待っても助けの

来る様子がありません。そこで、母が玄関に行き皆の履物と非常靴を抱え戻って来て、私たちは道路に面した窓から外に出ました。周りの家は同じように倒れており、埃で薄暗くなった道路には、多くの人がすでに外に出ています。しゃがみこんで子供の傷を調べている人、家に向かって何か叫んでいる人、子供は皆、泣いています。

逃避行

大人たちが相談して、とりあえず西の方に避難することになりました。途中、両側の家は全部倒れ、瓦やガラス、木切れの飛び散った道路を、ケガや火傷を負った大勢の人に交じって避難しました。頭をケガして血が流れフラフラ歩いている人、肩を支えられながら歩いている人、背中が血に染まっている人、上



「避難する家族と七歳の私」
 制作：三坂日奈子(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、川崎宏明

着がボロボロに焼けている人、大勢の人に交じって西大橋を渡って避難しました。太田川放水路の工事をしている所の草むらには、大勢の人がケガや火傷を負い、力尽き、座り込んだり倒れたりしていました。

その後、己斐の街に入り、しばらくすると突然、煤を水に溶いたような黒い雨が降ってきました。神社の境内で一時休んだ後、竹藪や田んぼ傍の細い農道を可部方面に避難しました。その辺りに来ると、右手に見える広島市街は大火災が発生していましたし、たくさんケガや火傷を負っている人とすれ違いました。小学一年生にはとても恐ろしい光景です。

可部町の親戚宅に夜遅く着きました。学校へ行った父は数日後、大火傷しながらも助かって、その親戚宅に運び込まれました。

エピローグ

当時七人だった家族は、被爆後五十年くらいの間に、祖父、祖母、母、弟、父の順に「歯が抜けるような感じで」亡くなり、今では妹と私の二人だけになりました。父の火傷と不自由になった目、耳は死ぬまで治りませんでしたし、母は心筋梗塞で、弟は癌で亡くなりました。また、現在生きている妹も大動脈剥離や卵巣摘出などの大手術をし、私も心筋梗塞を発症、何度も手術を受けました。いずれも放射線被曝の影響が色濃く出ている症状です。

「一滴の水」の気持ちで証言活動

私は「無色透明」「無味無臭」な「一滴の水」になったつもりで証言活動をしています。それは、政治、宗教、人種、国境など人間の作ったルールに染まることなく、「方円の器に従う」素直な水であり、それでいて「点滴石をも穿つ」エネルギーを秘め、そしてその点滴も集まれば「愚公山をも動かす」大きなエネルギーを持っている水。それが私の証言活動のバックボーンなのです。そしてその一滴の水のはるか前方には、「また見ぬ私たちの子孫が安心して暮らせる平和な世界」があると信じています。

国際平和シンポジウム（長崎）の開催

七月二十八日（土）、長崎市と公益財団法人長崎平和推進協会、朝日新聞社の主催、広島市と本財団等の後援により、「核兵器廃絶への道」持続可能な平和のために」をテーマに、二十四回目となる国際平和シンポジウムが長崎市の長崎原爆資料館ホールで開催されました。

開会式では、長崎市長、主催の朝日新聞社代表の挨拶に続き、後援団体を代表して本財団の小溝理事長が、核廃絶に向けた市民社会の役割を強調する挨拶を行いました。

まず、「愛と平和と一生懸命」をテーマにサッカーJ1のV・ファーレン長崎社長で通販大手ジャパネットたかた創業者の高田明氏と田上富久長崎市長による特別対談が行われました。

次に、オバマ米政権で国際安全保障・核不拡散担当の国務次官補を務めたトーマス・カントリーマン氏が登壇し、「核なき世界への選択肢」をテーマに基

「国際平和デー」記念行事の開催

国連は、毎年九月二十一日を「国際平和デー」と定め、世界の停戦と非暴力の日として、この日一日、敵対行為をやめるよう呼び掛けています。本財団では、この趣旨に賛同し、記念行事を開催しています。市民を含む約三十人の参加の下、原爆死没者慰霊碑に献花を行い、参加者全員で一分間の黙とうを捧げると

調講演を行いました。カントリーマン氏は、NPT（核兵器不拡散条約）加盟国にとって深刻な脅威は、核軍縮のペースが遅すぎることによって非核保有国の間の不満が高まっていることだと述べました。また、昨年の核兵器禁止条約の採択は歴史的快挙であり、強い道徳的・倫理的な声明だが、現状を打開する道が示されていないなどの限界もあると指摘し、今必要なのは多国間主義を信じる民主主義国家による核軍縮についての議

もに、平和の鐘を鳴らし、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を祈念しました。また、「二〇二〇年までの核兵器廃絶を」という平和首長会議の横断幕を慰霊碑前に掲げ、その実現を訴えました。

国内外の平和首長会議加盟都市においてもホームページやフェイスブックを通じた一〇〇日前メッセージの発出やメールマガジンによる呼び掛けにより、様々な記念行事が開催されました。
(平和連帯推進課)

国連軍縮フェローズの受入れ

国連が主催する軍縮専門家育成のための「国連軍縮フェローズシップ・プログラム」に参加する研修生（フェローズ）を、広島に十月一日（月）から二日間、受入れました。

このプログラムは、国連が昭和五十四年（一九七九年）から実施している研修事業で、広島では昭和五十八年（一九八三年）から毎年受入れを続け、本年度受入れの累計人数は九百人を超えました。

今回は、二十五か国の若手外交官等二十七人が参加しました。一行は一日（月）には、小溝本財団理事長から平和首長会議の核兵器廃絶に向けた取組などについて説明を受けました。続いて、平和記念資料館、原爆死没者追悼平和祈念館、原爆ドーム等を見学した後、原爆死没者慰霊碑への献花を行いました。広島市民との交流では、被爆の実相を伝える書籍と、各フェローズの国旗の色で構成された折鶴レイが手渡されたほか、地元の高校生から銅板で作った折



原爆死没者慰霊碑献花後のフェローズ一行

り鶴が寄贈されました。最後に、被爆体験証言を聴講しました。二日（火）には、放射線影響研究所を訪れ、ウーリック副理事長兼業務執行理事から放射線が人体に与える影響について講義を受けました。講義後は質問が相次ぎました。

台風で大幅な予定変更を余儀なくされた今回の受入れですが、一行からは可能な限り予定のプログラムを実施してほしいとの声が上がリ、限られた時間の中で有意義な広島滞在となりました。フェローズの皆さんは、とても熱心に受講され、被爆の実相について理解を深めるとともに、被爆地の思いを共有できた二日間となりました。
(平和連帯推進課)

「収蔵資料の紹介」コーナーで「お母さんに会いたい」を開催しています

展示場所 平和記念資料館 東館一階企画展示室
展示期間 平成三十年七月十二



敏子さんが被爆時に身に着けていた軍手 (高木尊之氏寄贈)



母・敏子さん(死亡時34歳)、長女・真紀子さん(当時7歳)

母は、横になっている間、化のしたやけどの傷がくっついてしまふまで、妹の真紀子を離さなかつたそうです。そして、疎開中で最期まで会えなかつた私のために、死の間際まで「写真(撮って)！」と叫んでいたと聞きました。(二男・恭之さんのお話より)

日(木) 約一年間
展示資料 軍手など実物資料十

「収蔵資料の紹介」コーナーでは、平和記念資料館で収蔵している約二万点の資料の中から、テーマに沿って数点ずつを展示しています。

一九四五年(昭和二十年)八月六日、一発の原子爆弾により、広島のみちは一瞬にして廃墟と化しました。大量の放射線を浴び、体を焼かれ、多くの人々が苦しみながら亡くなりました。親たちは愛するわが子を残し、その身を、その将来を案じながら、死んでいきました。残された子どもたちは頼るべき支柱を失い、途方に暮れ、悲しみに暮れました。

亡くなった親の年齢を超えた子どもたちにとって、その記憶は、時を経ても、大きな喪失感とともに心に刻みつけられています。今回は、母親の遺言を中心に、遺族の思いと合わせて紹介しています。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
☎(082) 241・4004

特別展「広島赤十字病院」を開催しています

展示場所 平和記念資料館 東館地下一階会議室(2) 及びホワイエ

展示期間 平成三十年七月二十日(金)〜平成三十一年三月末(予定)

展示内容 写真二十一点、現物資料十七点、市民が描いた原爆の絵十一点、映像一点

広島赤十字病院の被爆後の惨状と混乱の中で、の救護活動を物語る資料から、原爆被害の悲惨さを知り、戦争のおろかさ、命の尊さに思いをはせていただく

展示会です。

原子爆弾の投下により壊滅的な被害を受けた広島市において、倒壊や焼失を免れた数少ない医療機関の一つであった広島赤十字病院には、被爆直後から負傷者が殺到しました。設備や備品は破壊され、薬品も治療材料も底をつく状況で、生き残った医師や看護婦たちは、昼夜を分かたず救護にあたりました。

展示会場では、広島赤十字・原爆病院所蔵の「熱線のとがが残る椅子」や当時の収容患者が着用していた「病衣」等の現物資料のほか、横たわる負傷者や治療の様子を撮影した写真や動画、病院前に押し寄せる負傷者や治療を待たずに亡くなっていく人々を描いた絵などを紹介し

ています。

また、リニューアル前の東館で展示していた同院の「ガラス片の刺さったあとが残る壁」をホワイエに移設しました。こちらは、特別展終了後も常設展示します。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
☎(082) 241・4004

資料展「この時代の夕凧の街」を複製

漫画「夕凧の街」の発表十五年を記念して、「夕凧の街」複製原画展を、平成三十年九月十二日から平成三十一年二月末まで、平和記念資料館東館地下一階で開催しています。

「夕凧の街」は、平成十五年九月、「WEEKLY 漫画アクション」紙に掲載されました。「広島市に生まれ育ちはしたけれども、被爆者でも被爆二世でもありません。被爆体験を語ってくれる親戚もありません」と言う作者のこの時代の史代さん。ヒロシマと距離を置くこととした作者が、原爆と向き合い、丁寧に取材を重ねた結果が、被爆後十年



「廃墟の中のオアシス」と呼ばれた広島赤十字病院
菊池俊吉氏撮影/由子はるみ氏提供



「腕章」
上野照子氏寄贈



展示風景

を過ぎてても原爆の後障害に苦しむ若い被爆者の姿を繊細な筆致で表現した作品に昇華しています。この作品は国内外で高い評価を受け、現在、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ハンブル、中国語（繁体字）に翻訳され、世界中で原爆被害の理解を深める契機となっています。

資料展では原画を精密に複製したパネル二十三点を展示しています。あわせて、情報資料室内の展示ケースで、被爆者の森島茂雄さんが被爆前後の広島をたどった「消えた町 記憶をたどる」の原画も、十一月二十六日まで展示しました。森富さんの絵は、このさんも作

品を制作する上で参考にされたという精緻な鉛筆画で、修学旅行生たちが「被爆前の平和記念公園がこんな繁華街だった」と感心して見入っていました。

(平和記念資料館 学芸課)

「原爆の絵」が完成 —高校生たちが被爆体験を絵に描く—

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、平成十九年度から、本財団被爆体験証言者と同校生徒が共同し、証言者の記憶に残る被爆時の光景を描き、当時の状況を伝える「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

このたび、八人の証言者と十人の生徒が平成二十九年度から制作を進めていた十点の絵画が完成しました。

七月二日(月)に基町高等学校展示ギャラリーで行われた完成披露会には、八人の証言者と、絵を制作した生徒を始めとする創造表現コースの生徒のほか、本財団及び基町高等学校関係者が出席しました。



「閃光」
制作：曾根沙也佳(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、李鐘根



「私が初めて見た被爆者」
制作：岩本依路(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、岡田恵美子



「ヒロシマの最も長い夜(地獄の炎ときのこ雲の残塊)」
制作：河元愛香(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、中西巖



「吹き出物の治療」
制作：富士原芽依(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、笠岡貞江



「道に転がる屍」
制作：門脇友春(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、河野キヨ美



「生死不明の人たちを踏み分けながら逃げる」
制作：山土莉奈(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、原田浩



「私は地獄に迷い込んだんじゃろうか」
制作：宮本陽菜(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、篠田恵



「お母ちゃん!」
制作：中川雛(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、岡田恵美子



「被爆した馬」
制作：桂木晋作(広島市立基町高等学校普通科創造表現コース)、李鐘根

吹き出物の治療の様子を描いた生徒は、「絵の制作を通して、被爆から七十年以上が経った今でも消えない傷跡から、原爆の恐ろしさを改めて感じることができた一年だった」と話して

くれました。また、生死も分からない人々を踏み分けながら避難する場面を描いた生徒は、ギャラリートーク(作品解説)で、「見たことも、想像したこともない、目を背けたくなるような光景をどう表現すれば良いか、どう描けば良いのか、模索し続けた。話を聴いて、それを理解するだけでなく、伝える立場にならないければならない、受け取るだけでなく、私達が次の世代に伝え

ていかなければならないという事に気付かされた」と制作の難しさと自らの思いを話してくれました。

完成した「原爆の絵」は、被爆体験をより深く理解してもらうため、証言者による被爆体験講話で活用するほか、絵の貸出や、画像データの提供なども行い、原爆被害の実相を後世に継承するために役立てています。

(平和記念資料館 啓発課)

キッズも平和キャンプ

「楽しみながら平和を考える」

本財団では、六月二日から二泊二日の日程で、小・中学生向けの平和キャンプを広島市似島臨海少年自然の家との共催で実施しました。

通算二十五回目となる今年のキャンプには、四年生以上の小学生十九人、中学生三人、十八歳以上のボランティア三人の計二十五人が参加しました。

一日目は、被爆体験伝承講話を聴講後、被爆後の復旧の様子を紹介したアニメを鑑賞するなど被爆の実相について学習し、続いて、原爆ドーム前から広島港まで被爆電車に乗り、車内で沿線の被爆建物などについて説明を受けた後、似島へ移動しま

した。

似島では、原爆で傷ついた沢山の人々を収容した似島について、歴史を含めて詳しく学び、遺構を見学しました。

夜には、ピースキャンドルを灯し、親睦を深めました。

二日目は、似島とバウムクーヘンの関わりを学び、実際に皆で協力してバウムクーヘンを作り、おいしく食べました。

最後に、似島原爆慰霊碑を参拝し、班ごとに二日間の学習の振り返りを行いました。振り返りの中では「原爆でたくさんの方が苦しんで辛い思いをしていたことが分かった」、「平和がどれくらい大切かが分かった」といった声が出るなど、次世代を担う小・中学生が、楽しく時間



被爆電車内で説明を聞く様子

を過ごしながら、平和について考える有意義な機会となりました。

(平和記念資料館 啓発課)

英語で伝えよう ヒロシマセミナーの実施

平和記念資料館では、原爆被害の実相を正しく英語で伝えるための知識と表現を学ぶ「英語で伝えようヒロシマセミナー」を、平成十八年度から実施しています。

今年度は七月十四日(土)にベーシック編、二十一日(土)にアドバンス編をそれぞれ実施し、十代から八十代まで合計三百三十二人が参加しました。

ベーシック編では、資料館職員が原爆被害の概要を英語で説明した後、被爆者の梶本淑子さんが自身の被爆体験について日本語で話し、ひろしま通訳・ガイド協会の渡邊妙子氏が、英語で逐次通訳を行いました。

アドバンス編では、広島文教女子大学のクレイグ・ネヴィック氏が講師を務め、原爆被害の概要を英語で説明した後、平和



アドバンス編グループワークの様子

記念公園内の碑や被爆資料等について英語で話すグループワークを行いました。

参加者からは、「被爆体験証言を初めて聞いて良かった」、「分かりやすい英語で参考になった」、「学んだことを伝えていきたい」といった声が寄せられました。

資料館では、来年一月にも同セミナーを開催する予定です。

(平和記念資料館 啓発課)

国内3都市で原爆展を開催しました

平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶に

向けた国内世論を醸成するため、平成八年度から国内各地の都市で原爆展を開催しています。

本年度は、岡山県笠岡市、岡山県総社市、兵庫県芦屋市で開催し、三都市合わせて、約二千三百人の来場者がありました。岡山県内での開催は今回が初めてです。

各展示会場では、被爆資料のほか、被爆の実相や核兵器の現状を伝える写真パネル、高校生と被爆体験証言者が共同で描いた原爆の絵などを展示しました。また、笠岡市では白石多美子さんが、総社市では寺本貴司さんが、芦屋市では山本玲子さんが、それぞれ被爆体験講話を行いました。聴講された方は、被爆体験証言者の一言一言に耳を傾けていました。

来場者からは、「広島にはなかなか行けず、今回地元に住ながらにして貴重な資料を見ることができて良かった」、「連れてきた孫がとても熱心に見学していた」、「命の尊さを強く感じた。後世へ受け継ぐことが大事だと感じた」などの感想が寄せられました。

実施の概要

【岡山県笠岡市】

期間：七月二十七日（金）～八月二日（木）（休館日を除く、六日間）

場所：笠岡市民会館

来場者数：六百五十八人

【岡山県総社市】

期間：八月五日（日）～八月十五日（水）（十一日間）

場所：総社吉備路文化館

来場者数：二百七十六人

【兵庫県芦屋市】

期間：八月十九日（日）～八月二十六日（日）（休館日を除く、七日間）

場所：芦屋市民センター

来場者数：千三百五十人

（平和記念資料館 啓発課）



展示解説を受ける来場者（笠岡市）

海外からの来訪者が発信するメッセージ

平和記念資料館芳名録より抜粋、日本語に訳したものを（仮訳）を掲載しています。

マカモ・デリヨーヴォ・ヴェロ

ニカ・ナタニエル／モザンビーク共和国国民議会議長



広島市民の皆様へ

我々代表団は、原子爆弾の犠牲者を哀悼し、また、かけがえの無い命を失い、戦争の犠牲となった日本国民に連帯の意を表します。

モザンビーク国民は、悪夢のような戦争を経験し、その悲惨さを身にしみて理解しています。

従って、我々は平和を支持

し、人類すべてに平和を希求します。

モザンビーク国民は、核兵器のない世界と原子力エネルギーの平和的利用を擁護し、モザンビークと日本の友好協力関係の強化、世界の平和と調和を願います。

共に世界を平和にする中心となりましょう。

（二〇一八年二月十日）

カル・ジャヤスーリヤ／スリランカ民主社会主義共和国国会議長



広島訪問はスリランカ代表団にとって記念すべきものとなりました。

一九四五年八月六日に広島の人々が受けた苦しみに心が痛みました。

このような破壊行為が二度と

繰り返されないよう祈ります。

善き行いをすべく全力を尽くします。

広島の皆さまの平和と繁栄と幸福とを祈念いたします。

（二〇一八年三月一日）

ムハンマド・アル・イーサ／ムスリム世界連盟事務総長



この歴史的な広島平和記念資料館を訪れることができ嬉しく思います。また、資料を拝見し、お話を伺って非常に感銘を受けました。人類の存在に対する脅威である核兵器拡散を制限する重要性を再確認させる、この人類の悲劇がもたらした損害の深さを痛感しました。社会生活において平和は、最も重要な人類の願いであると感じました。

私たちは、文化や芸術を通じて

て他国を魅了する「ソフトパワー」こそが調和と真の人類の平和の武器であると考え、またこのソフトパワーを得る者こそが真の勝者だと考えています。

強力な権力が一時的に勝利を得たとしても、その強大な影響はそれを行使する名目上のものにはすぎないと信じています。

（二〇一八年三月十四日）

ニキル・セス／国連事務次長補兼ユニタール事務局長



これほどに心を揺り動かさず、胸が締め付けられたことはありません。広島平和記念資料館が今の世に伝える、無意味な戦争、死、破壊、そして兵器の無益さを訴えるメッセージは、後世に残る貢献のひとつとなるでしょう。しかし、平和への誓

い

い、復興、連帯、調和もまたヒロシマからのメッセージです。人類の繁栄と尊厳を守るためには、世界はより一致団結する必要があるのです。

(二〇一八年二月三十日)

アイマン・アリ・カメル／駐日エジプト・アラブ共和国特命全権大使



温かい歓迎に心から感謝いたします。また、広島平和記念資料館を訪れた際に館内をご案内いただき誠にありがとうございました。

本日私が目にしたものは、世界平和の大切さを認識させるものであり、人類と世界平和を守るために暴力を放棄し、世界が大量破壊兵器を手放すことに取り組ませるものであります。

(二〇一八年四月二日)

カミラ・ハニファ／駐日ブルネイ・ダルサラーム特命全権大使



広島の方々の経験は、私たちが共に力を合わせて核兵器のない世界を作らなければいけないという事を教えてくださいます。

アラアの祝福が皆様と共に常にありますように。

(二〇一八年四月九日)

エウニシオ・ロペス・デ・オリヴェイラ／ブラジル連邦共和国上院議長

今回の私の訪問に同伴した妻モニカと娘マリア・エドゥアルダ、並びに日本への公式訪問において私が率いたブラジル連邦上院議員団の上院議員、アントニオ・アナスタシアとジョルジ・ヴィアナを代表して、広島に投

下された原子爆弾の犠牲者となつた罪のない数十万もの犠牲者の御親族、御子孫に心よりお悔やみ申し上げます。

ブラジル国会の議長として、二度とこのようなことが繰り返されないことを望みます。神が我々すべてをお守りいただけますように。



(二〇一八年四月十九日)

アブル・ハッサン・マームード・アリ／バングラデシュ人民共和国外務大臣

バングラデシュ政府とバングラデシュ国民を代表して、広島での原爆被害の犠牲となられた方々に謹んで哀悼の意を捧げます。

広島の皆さまの、生活を再建した復活力、世界平和の実現に

向けて活動し続ける決断力に、敬意を表します。



(二〇一八年五月十五日)

ラインハルト・トット／オーストリア共和国連邦参議院議長



核兵器が初めて使用されたこの場所で、犠牲者を悼むとともに、惨禍を生き抜いた方々への強い連帯感を覚えています。

この唯一無二の苦しみを前に、オーストリアの核軍縮政策を続ける決意を新たにしました。

(二〇一八年五月十七日)

フランシスコ・シャヴィエル・エステヴェス／駐日ポルトガル共和国特命全権大使



広島と平和記念資料館を訪れることができたことを貴重な経験だと思えます。

我々が考えるべきことは一つだけ、「ノーモア！」

人が人を苦しめることは理解不能で耐えがたいものです。

善意ある人の願いは一つだけ、それは、二度と繰り返さないことです。

(二〇一八年五月二十五日)

「被爆者から語り継がれた思いを聞き、被爆の実相を学んでみませんか」
**被爆体験伝承者等を
 全国に派遣しています**

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆者の体験や平和への思いを次世代に語り継ぐため、「被爆体験伝承者等派遣事業」を本年度から開始し、被爆者から直接受け継いだ体験を語り継ぐ「被爆体験伝承者」や被爆者が記した被爆体験記・原爆詩を朗読する「被爆体験記朗読ボランティア」を全国に派遣しています。

派遣者は、申し込まれた団体が行う平和学習等の場で、被爆体験伝承講話又は被爆体験記朗読会を実施します。

修学旅行の事前学習などに活用する学校や、なかなか広島に來られない子供達に、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さを伝えるため、交通費などを当館が負担し、全国に被爆体験伝承者等を無料で派遣しています。

平成三十年十月末現在、二百七十四件の申込を受けており、これまでに二百六件派遣しました(被爆体験伝承講話・

百七十九件、被爆体験記朗読会・二十七件)。

派遣先の学校等からは、児童たちが最後まで引き込まれ聴いている様子だった、などの感想が寄せられています。

また、海外にも被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた世論を醸成するため、平成三十年十一月に、イギリスのマンチェスター市とコベントリー市に被爆体験伝承者一人と被爆体験記朗読ボランティア二人を派遣しました。

両市において、小学校での被爆体験伝承講話、被爆体験記朗読会の開催や、平和団体所属の市民等との交流会などを行いました。

**【寄せられた感想(抜粋)】
 大阪府高槻市立奥坂小学校**

広島市の地図を元に、原子爆弾、被害の様子、池田精子さんの被爆体験について詳しくお話しいただきました。また最後には、伝承者の古田さんが、お父様の体験から自身が感じになったことを話していただき、さらに当時の様子をイメージすることができました。

児童の感想からは「いかに核兵器がひどいものかわかった、



奥坂小学校での講和の様子

た、「この貴重な話を覚えておき、自分たちがこれから伝えていく」、「平和の種をもらったので、それに花をさかせられるように戦争についてしっかりと学びたい」などの感想が見られました。

宮崎県西都市立妻南小学校

とても素晴らしい朗読会でした。詩を見せずに、ゆっくりと語りかけるように聴かせるといいう手法、間合い・トーン・表情・ジェスチャーなど、その状況が目に浮かび、作者の悲しみが子供たちに十分伝わってきました。

テレビや新聞などを通してなるとなく知識として知っていた子供たちでした。実際被爆された方々の詩や体験記は、戦争や



妻南小学校での朗読会の様子

原爆の怖さや、悲しさ、悲惨さを痛感させられるものでした。

朗読会の途中、思わず涙ぐむ子や、教室に戻った後、静かに体験記を読み返す子もおり、深く平和について考えたようでした。お越しいただいて、貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

【お問い合わせ】

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
 ☎(082) 207・1202

**被爆体験記の執筆を
 お手伝いしています**

被爆者の高齢化が進み、その体験を記録して原爆の悲惨さを

非人道性を人類の教訓として後世に伝えることが重要となっています。国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆者の記憶を体験記として残したいが自分一人では困難な方から聞き取りを行い、体験記としてまとめる被爆体験記執筆補助事業を行っています。

今年度も執筆補助希望者の募集を行い、九人の体験記を作成する予定です。十月末時点で四人の方からの聞き取りを実施しました。

聞き取りをする前に、まず当館の担当者は、申し込んだ方の被爆に関する証言映像などの資料を集め、昔の住所・所属(学校や職場)などの情報から、おおよそ当時の様子について調べなどの準備をします。ある方の聞き取りでは、拡大した昔の地図を見てもらい、「当時のこの地区には、Hさんはこの一軒のみですが、もしかしてこれがお宅ですか?」と聞くこと、そうじゃそうじゃ!と隣はSさんとYさんで、うちと合わせて三軒だけが焼け残った!などと、どんどん当時の情景が浮かび上がりました。

「家が一瞬で倒壊し、友人のうめき声を聞きながら助けられ



聞き取りの様子

なかった」、「まだ中学生だった
が、人手がなく、一人で河原に
行って親を火葬した」と話され
る表情には、物悲しさや無念さ
がにじみます。被爆体験は言葉
では表現し尽せないほど辛いも
のです。聞き取る側も、つい目
を潤ませる瞬間もしばしばで
す。

しかし、被爆者の証言や体験
記から教わることは、辛さ、悲
しみだけではありません。今回
の聞き取りでは、「結婚差別を
憂慮して、経済的に自立しよう
と薬剤師になり、最終的には共
稼ぎの家庭を希望する男性と結
婚した」と話される、働く女性
の元祖のような被爆者の方のた
くましさや、九死に一生を得て、
軍国教育から開放されて感じた

自由の素晴らしさを、身振り手
振りで表現される被爆者の方の
姿に心を打たれました。

被爆体験を伺い、悲惨な歴史
を繰り返してはならないという
教訓はもちろんです。そんな
体験を経てみなお、前を向き、
ひたむきに生きてこられた姿
に、次世代が学ぶこともたくさ
んあるのではないのでしょうか。

国立広島原爆死没者追悼平
和祈念館には被爆体験記が約
十四万編収蔵されていますが、
執筆補助事業で集まったもの
も、十三年間で百三十編余りあ
ります。これらは祈念館に来館
くたされば読んでいただけま
す。予約や申し込みは不要です。
ぜひ祈念館を訪れ、被爆体験記
に触れてください。
(原爆死没者追悼平和祈念館)

広島市外国人市民の 生活相談コーナー をご利用ください

通訳相談員が、生活全般につ
いて不安を抱える外国人市民の
生活相談、生活関連情報の提供、
行政機関窓口等との通訳などを
行っています。

『外国人市民のための生活ガイドブック
(広島市発行)
翻訳：英語・中国語・ハングル・ポルト
ガル語・スペイン語・ラリビノ語
ベトナム語



広島市のHPからも
ダウンロードできます。

QRコードはこちら→



平成三十年七月豪雨災害の際
には、被災した外国人市民の相
談を受け、区役所などの担当窓
口に取り次ぎ、また、通訳とし
て同行するなど、災害に関する
各種手続や支援に関する相談な
どへの対応を行いました。

【連絡先】

☎(082) 241-5010

E-mail: soudan@pcf.city.
hiroshima.jp

【場所】

広島国際会議場一階 国際交流
ラウンジ内

【時間】

月曜日～金曜日 午前九時～午
後四時

【対応言語】

中国語(月～金)、スペイン語



国際交流ラウンジ

国際交流ラウンジ をご利用ください

広島国際会議場一階・国際交
流ラウンジは、国際交流・協力
に関する情報や、外国人市民の
ための生活に役立つ情報など
を、スタッフが日本語と英語で
提供しています。トリオフォン
サービス(電話による三者間通
話)を利用して、通訳ボラン
ティアの協力を得ながら、英語
以外の言語での対応も行ってい
ます。

(月・水・金)、ポルトガル語(火・
木・金)他
【休日】
祝日、八月六日、十二月二十九
日～一月三日

さらに、世界の新聞・雑誌の
閲覧や、図書の閲覧・貸出、学
習や会合ができるスペース、無
料インターネットなど、どなた
でもご利用いただけるサービ
スを提供しています。

また、新聞・雑誌のバックナ
ンバーの無料配布(年二回)、
除籍した図書資料の無料配布
(年一回)、JICAボランティア
体験者が派遣国の魅力を語る
「JICAサロン」(年四回)と
いったイベントも開催していま
す。

併設する外国人市民の生活相
談コーナーでは、日常生活上の
悩みや問題の相談に、中国語、
ポルトガル語、スペイン語で対
応しています。

是非お気軽にご利用くださ
い。

【連絡先】

☎(082) 247-9715

E-mail: golounge@pcf.city.
hiroshima.jp

【場所】

広島国際会議場一階

【時間】

午前九時～午後六時
(四月～九月は午後七時まで)

【休館日】

十二月二十九日～一月三日

平成二十九年度下期 および平成三十年度 上期国際交流・協力補助金交付事業公開報告会の開催について

当財団では、広島市内の団体が行う国際交流・協力事業を育成・振興するため、国際交流・協力補助金を交付しています。

申請は年二回、上期（四月～九月）実施事業分を一月、下期（十月～三月）実施事業分を七月に受け付けています。

このたび、平成二十九年度下期と平成三十年度上期に補助金を交付して事業を実施された四団体の公開報告会を以下のとおり実施します。

是非お越しいただき、今後の皆さんの国際交流・協力活動に生かしてみませんか。

【実施日時・会場】

平成三十年十二月四日（火）

午後二時～四時

広島国際会議場三階 研修室2

【報告事業・団体】

●和紙ちぎり絵・折り鶴を中国へ広めて、平和を祈る（特定非営利活動法人 虹橋の会）

中国で日中永久友好について

の座談会の実施や現地の学生とのちぎり絵や折り鶴の体験を通して、平和の大切さを学び、相互理解を深めました。



中国の学生による和紙ちぎり絵体験の様子

●カンボジア ツアー2017（ひろしまカンボジア協会）

カンボジアで農村や小学校、広島市に在住していた留学生との交流活動等を行い、相互理解を深めました。

●ぺあせろべ2017（ぺあせろべ実行委員会）

広島市中区基町にある中央公園芝生広場で、様々な国籍を持つ人たちが、各国の町や食べ物、踊りなどの生活文化を紹介するイベントを行い、国際交流や多文化共生のまちづくりの推進を

図りました。

●HAPイタリヤ国際交流使節団（一般社団法人 HAP）

イタリヤで、障害者支援施設でのワークショップやイベントに参加し、広島文化・歴史の紹介や意見交換会を行うことで、相互理解や国際交流につながりました。

（国際交流・協力課）

JICAサロン 「キルギスってどんな国？ 青年海外協力隊が語る派遣国の魅力」

七月二十二日、広島国際会議場国際交流ラウンジを会場に、

（独）国際協力機構（JICA）中国センターとの共催で、平成三十年度第一回JICAサロンの「キルギスってどんな国？ 青年海外協力隊が語る派遣国の魅力」を開催しました。

今回は、二〇一六年から二年間、「青少年活動」という職種でキルギス共和国にて活動した片山美弥さんにお話を伺いました。

中央アジアに位置するキルギスは、一九九一年に旧ソビエト



キルギスの魅力をたっぷりと話してくださいました。

連邦から独立した小さな国です。農業と牧畜以外の基幹産業が少なく、中央アジアの中では貧しい国とされています。しかし、国土の約四割を占める三千里、湖周辺には豊かな自然が広がり、その美しさは「ジブリの世界」とも言われています。

日本人にはまだあまり馴染みのない国かもしれませんが、キルギスは日本と「兄弟説」があるくらいの親日国で、外見も日本人と似ており、多くのキルギス人が日本や日本人に親近感を抱いているそうです。また、おもてなしの精神が強く、頻繁にお茶に誘われるそうので、「仲良くなる秘訣は一緒にお茶を飲むこと」など、キルギスの人々の

素顔が垣間見えるエピソードを語ってくださいました。

また、片山さんが撮影した動画をしながら、キルギスの様子を紹介していただきました。市場や、ノマドゲームと呼ばれる騎馬戦など、普段見る機会の少ないキルギスの風景や、派遣先の小学校で児童たちがコムズというキルギスの伝統的な三弦の楽器を演奏する様子など、とても興味深いものでした。

キルギスには、孤児や女性の地位の問題など社会的な課題もまだまだ多くあるそうです。しかし今回、片山さんのお話を通じて、キルギスの文化や人々の暮らし、そして観光地としての魅力を十分に知ることができました。

（国際交流・協力課）

災害関連情報の多言語サイトを開設しています。

当財団では、平成三十年七月豪雨災害時に、広島市在住外国人の皆さんに災害関連情報を提供するため、多言語サイトを開設しました。国際交流・協力課のホームページを通じて、七月九日から発信をしています。

広島市市民局人権啓発部人権啓発課 多文化共生担当との協働で、提供する情報を選別し、広島市に登録している災害通訳ボランティアや当財団の通訳相談員が翻訳を行いました。

今なお、広島市や周辺の地域では復旧に向けた活動が続いています。少しでも、被災した在住外国人の皆さんの生活上の不安や心配事を和らげることができるよう、支援していきたいと考えています。

【URL】
http://www.pcf.city.hiroshima.jp/ired/

【内容】
水道、ガス、電気などのライフライン情報

●JR、バスなどの交通情報
●広島市からの災害関連情報

●断水給水情報
●り災証明書について
●被災者に対する支援制度
●義援金の受付について
●出張所の臨時休業 など

【言語】
●八言語

・日本語、英語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、フィリピン語、ハンガール

【アクセス件数】 七月九日〜七月二十三日（十五日間）

・総アクセス数 三三四八件
・一日平均 約二二〇件
・最大件数は、七月十五日のベトナム語の四四八件です。

姉妹・友好都市の日 記念イベント 『ボルゴグラードの日』

九月九日（日）、記念イベントを開催しました。主催ー平成三十年度ボルゴグラードの日実行委員会

まず来場者に、ロシア・ボルゴグラード市の紹介展示コーナーで、ロシアの民芸品やボルゴグラード市の風景写真、また、広島市とボルゴグラード市の青少年交流の紹介展示を見ていただきました。

次の食文化体験コーナーでは、ロシアのお菓子「パフラヴァ」とジョージアワインなどを味わいながら、田中香月さんのピアノ演奏を楽しみました。ホールでの記念セレモニーでは、実行委員長、広島市長が登場してあいさつし、ボルゴグラード市長のメッセージを、ロシア人、ユリア・スミルノワさんがロシア語で代読。また、ロシア連邦総領事館領事のシュベツォワ・エレナさんからあいさつをいただきました。



田中香月さんと広島合唱団の皆さんによる演奏

スミルノワさんも参加したロシア語ミニ講座、ロシアグッズが当たるお楽しみ抽選会をはじめ、再度広島合唱団が登場し、会場の参加者と合唱して大いに盛り上がりました。

当日は、悪天候にもかかわらず、約百二十人の参加者があり、ボルゴグラード市との姉妹都市交流を深めました。

（国際交流・協力課）

新国際交流員のご紹介

今年の八月から、アンドリュー・デンプスター国際交流員に代わり、イギリス出身のマーク・マクフィリップス国際交流員が国際交流・協力課に就任しました。

着任あいさつ
マーク・マクフィリップス



マーク・マクフィリップス
国際交流員

今年八月にイギリスの大学を卒業し、その後すぐに広島に参

りました。

来広して数か月経ちました。すでに学校訪問や相談日を通して市民と交流し、平和記念資料館をはじめとする広島の名所や旧跡を訪れ、この町の歴史や文化について様々なことを学びました。

私は、イギリスと日本に限らず、様々な国の文化や歴史に興味を持っているため、様々な人と交流したいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

【Have a Natter!】のご紹介

以前から実施していた「相談日」の名称や内容を一部変更し、十二月から「Have a Natter!」を実施します。「Natter!」はイギリス英語で、「おしゃべりする」という意味です。マーク国際交流員への質問や相談等の会話を通して、海外のことについて触れてみませんか。

【実施日】 毎月第四水曜日

※英語と日本語の時間あり

【場所】 広島国際会議場一階

国際交流フロンツ

■詳細は国際交流・協力課まで

☎（082）242・8879



プロフィール

(いらい こうき)

1974年広島大学医学部卒業。1990年から2012年まで広島大学医学部教授。この間、2002年から2006年まで医学部長。専門は人体病理学。1963年から広島国際青少年協会に入会、2011年から一般社団法人となった同協会の代表理事、2012年から一般社団法人広島ハノーバー友好協会会長を務める。

“平和について思う”

ドイツ・ハノーバー市との
青少年交流

一般社団法人広島ハノーバー友好協会
会長 井内 康輝

ドイツ・ハノーバー市との青少年交流の始まりは、一九六八年(昭和四十三年)に遡ります。この年、広島国際青少年協会総主事であった故林壽彦氏(二〇一〇年〔平成二十二年〕十月逝去)が、日独政府間の文化協定に基づく日本からの初めての訪独青少年代表団の監督としてハノーバー市を訪れたことがきっかけでした。当時のハノーバー市長、ヘルベルト・シュメルスティーク氏から、国家間の交流よりも都市間の交流をもっと発展させるべきではないかという提唱があり、広島市とハノーバー市との間で青少年の交流が始まることになりました。

一九七〇年(昭和四十五年)、広島市から二十二人の青少年使節団がハノーバー市に初めて派遣され、一九七二年には二十五人が、一九七二年には三十二人の青少年使節団とともに当時の広島市長、山田節男氏もハノーバー市を訪問しました。一九七三年(昭和四十八年)からはハノーバー市から広島市への使節団の訪問も始まりました。交流十周年となった一九七八年(昭和五十三年)には、ハノーバー市長から豆つげ樹木三千本が贈られてきたことから、広島市は当時の広島市民球場横に沈床花壇ハノーバー庭園を造園しました。

こうして交流が十五周年を迎えた一九八三年(昭和五十八年)、広島市とハノーバー市との間の姉妹都市縁組が決まり、五月二十七日にハノーバー市において荒木武広市長とシュメルスティーク市長との間で調印式が行われました。

広島市では、一九七九年(昭和五十四年)二月に広島・ハノーバー協会が発足し、事務局は広島国際青少年協会内に置くことが定められました。ハノーバー市では、一九七八年十二月に友好協会が発足し、事務局はハノーバー市青少年局に置かれていました。これ以降、青少年の交流はこれら事務局が主体となって行うことになりました。

二〇〇五年(平成十七年)、当時の広島市長、秋葉忠利氏と林壽彦氏の発案で、青少年国際平和未来会議(IYCF)が創設されました。広島市とハノーバー市がそれぞれの姉妹都市によりかけて青少年が集い、青少年の手による平和活動を探る会議となりました。この会議は広島市と他都市の交互開催の形をとり、現在まで広島市とハノーバー市が中心となっており、ときを越えて続いています。

一時期停滞気味であった広島市とハノーバー市との青少年の相互訪問は、二〇一二年(平成二十三年)二月にハノーバー市において、前年に逝去された林壽彦氏の追悼会が行なわれるにあたって、私が



ハノーバー訪問団(2014年)

招待された際、青少年の交流を復活させることを約束しました。任意団体としての広島・ハノーバー協会は活動が休眠状態でしたが、私は二〇一一年四月に広島国際青少年協会が社団法人化されるにあたってその代表理事になり、あわせて一般社団法人広島ハノーバー友好協会を設立することしました。活動を青少年交流のみならず、文化交流及び経済界の交流へ拡げるために、理事として、上田宗四氏(茶道上田宗箇流家元)、椋田昌夫氏(広島電鉄株式会社代表取締役社長)、坪井宏氏(広島信用金庫会長)、渡辺博之氏(故人・ドリームベッド株式会社社長)の各氏に加わっていただき、二〇一二年(平成二十四年)十二月の設立総会をへて活動を開始しました。

二〇一四年(平成二十六年)四月、再開したハノーバー訪問団は

青少年の代表十四人、和楽器奏者五人、広島電鉄社員四人、株式会社アンデルセン社員三人など計三十一人からなり、ハノーバー市では、市長表敬訪問、平和祈念施設エグディエン教会での追悼行事などに加え、青少年のホームステイ、市庁舎での邦楽演奏会、路面電車とバスを運営するユーストラ社訪問などを行いました。

二〇一五年(平成二十七年)十月には、ハノーバーから十二人が来広して広島市長への表敬訪問、原爆死没者慰霊碑(広島平和都市記念碑)への参拝、広島ハノーバー友好協会との交流パーティーなどを行いました。ハノーバー市への訪問は二〇一六年(平成二十八年)にも二十二人で行い、今年、二〇一八年は交流開始から五十年目の節目にあたり、四月には広島市からハノーバー市へ(青少年十七人を含む三十四人)、八月にはハノーバー市から広島市へ(九人)の相互訪問が実現しました。ハノーバー市の広島ハイム(林園)、広島市のハノーバー庭園、ともに記念植樹を行い、交流の歴史の新たなページを加えています。

今後とも、青少年を含めた各層の人々の人的往来が相互理解を生み、世界平和達成の一步となることを信じてこの交流を大切に続けてゆきたいと思っています。

(平成三十年九月寄稿)